

2020年5月10日(日)

上尾合同教会

聖書 箴言 3章 7～12節

ヨハネの黙示録 3章 16～19節

説教「黙示録⑱—そこで、あなたに勧める」

武田真治牧師

お元気でお過ごしでしょうか。こうして説教を録音して、皆さまと共に礼拝をしているということ、これが、単に上尾合同教会だけではなくて、教会以外の方からも「久し振りに武田先生の説教が聴けた。」と言って、お手紙をくださる方もおられたり致します。なるほどなあと思ひながら、改めてしっかりしなきゃいけないなと、そう思わせられています。

ラオディキア教会に対するイエスさまの言葉を、今聖書を通して読み進めています。特に、今日のイエスさまの言葉は、キリスト教の考え方と言いますか、イエスさまの視点・観点というものをよく表している箇所だと思います。それは、17節の言葉なのですが、もう一度、ヨハネの黙示録第3

章 17節を見てください。新約聖書 456 頁。3 章 17 節「あなたは、『わたしは金持ちだ。満ち足りている。何一つ必要な物はない』と言っているが、自分が惨めな者、哀れな者、貧しい者、目の見えない者、裸の者であることが分かっていない。」この二重括弧で書かれている言葉と言うのは、当時のラオディキアの町の住民たちの言っていた言葉だと言われています。解説書によれば、大きな地震があったときに、近隣の町や村が、当時この辺りを支配していたローマ帝国にお願いをして、金銭的な援助を貰って、復興を果たそうとしたことに反して、ラオディキアの人たちは、この言葉『自分たちは、大丈夫です。満ち足りています。必要なものはございませんから。』と言って、ローマ帝国の、いわば金銭的援助はもらえない、断ったんだと。そして、自分たちの力でお金を出し合って、地震から復興した。しかもその町を、商業や貿易、あるいは地場産業であります繊維工業をさらに活発化するための都市計画を行って、再建したんだと。同時に市民のために、劇場・スタジアムや大きな浴場、温泉施設ですね、それもちゃんと建築していったんだと。まさに、自分たちは、金持ちだ、満ち足りている、不足しているものは何もないんだ。という、ラオディキアの人たちの自信に満ちた言葉であったと。そして、おそらくその町に集っていた、キリスト教の教会の人たちも、やはりその豊かさに浴していたと申しますか、大きな教会になっていたと考えられています。

そういう状態に対して、イエスさまが、しかしですね、17 節で「そう言っているが、自分が惨めな者、哀れな者、貧しい者、目の見えない者、裸の者であることが分かっていない。」表面的にはとても豊かで、お金持ち、何も欠けることがない。そうかも知れない。しかし、本当の姿と言いますか、それは、むしろ惨めで恵まれていない状態じゃないのか。そのことを何よりあなたがたは気づいていないと、非常に厳しく指摘しておられる。そういう箇所なんですよ。

実は、7つの教会がヨハネの黙示録には紹介されている、そのそれぞれのイエスさまの言葉が書かれているんですが、他の教会でスミルナという教会があるんですね。453 頁。このスミルナの教会というのは、実はこのラオディキアの教会とは真逆で、とても貧しい町、そこで教会も貧しい状態にあったと考えられている教会なんです。

ヨハネの黙示録第 2 章を読んでみましょうか。「スミルナにある教会の天使にこう書き送れ。『最初の者にして、最後の者である方、一度死んだが、また生きた方が、次のように言われる。「わたしは、あなたの苦難や貧しさを知っている。だが、本当はあなたは豊かなのだ。」表面的には非常に厳しい状態にある、迫害の状態にあった。そして貧しい状態にあるけれども、本当はあなたは豊かなのだよ。神様の目から見れば本当は豊かだ、と言う風に、ここでイエスさまはおっしゃっています。先ほどのラオディキアの場合は、表面的には豊かだ。本当にお金をいっぱい持っているん

だ。けれども、内面的と申しますか、神様の目から見たら、とっても貧しい状態なんだよと言われてる。ここが、やはりキリスト教のイエスさまの視点と申しますか、観点、目の付け所が良く表れているところではないだろうか。言い換えるならば、本当の豊かさというのはい体何だろうか。本当の豊かさを持つべきだという風におっしゃっておられるところなんです。

例えば、イエスさまは、ルカによる福音書第 12 章 21 節で「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」と言われておられます。前の協会訳聖書で申しますと、「自分のために宝を積んで神に対して富まない者は、これと同じである。」とおっしゃってますよね。この世的にたくさんの財産を持って裕福になっていても、神様に対して豊かでなければダメなんだよ。そして、人間の本当の豊かさは、神様との関係で豊かであるかどうか。まさに今日の黙示録で、ラオディキアの住民、またそこにある教会員の人たちに対しては、経済的に豊か、満ち足りていると自慢しているけれども、神様との関係から言うならば、「惨めな者、哀れな者、貧しい者である。」ということが分かっていない。故にイエスさまは、マタイによる福音書 19 章 23 節では、はっきりこうおっしゃっています。「はっきり言うておく。金持ちが天の国に入るのは難しい。」本当にはっきりおっしゃっていますね。ラオディキアの教会のお金持ちの方たちが、天の国に入るのが難しい。なぜ、お金持ちは神様との関係で難しくなってしまうのか。その理由が、まさにここでラオディキアの人々が、『わたしは金持ちだ。満ち足りている。何一つ必要な物はない』と言っている。つまり、もう自分たちは満足している。これ以上、必要なものはない。ここで、この点にあるのではないか、言えるのではないか、と思います。

ここにあるのは、生活が裕福だと、何不自由なく生活をしている。心配がない、生活への心配がないから、心も充分満たされている。大丈夫だ。もう自分たちは満ち足りています。そう思っている。そこが、実はそこに大きな問題が潜んでいるのではないか。現代の私たちにも、充分通じることで、つまり、たくさんの財産や贅沢な品物に囲まれて、何不自由なく生活していることが、そうしていることで、心も豊かになれるんだと。反対に言うならば、心が豊かになるためには、何不自由のない生活、豊かな日常生活というものがあれば、心は豊かに生活できるんだ。そうどこかで思い込んでしまっていないだろうか。ラオディキアの人たちは、生活が豊かならば心も豊かになれるんだと、そう思っておられた。ものの豊かさが心の豊かさにつながると、どこかで思い込んでいる。それは、私たちもやっぱりどこかで、心が豊かなのは、生活が豊かだからだと。やっぱりどこかで、そうじゃないという思いも心にありながら、しかしどこか心の片隅のところで、やっぱり生活が豊かじゃないとダメだよねと思っているところがないだろうか。

確かに一方で、貧しいと心が荒むというのは、私たち経験をするとところもあるのではないかな。確かに、ものがない、貧しさの中で心まで荒んでしまうということはもちろんあると思います。しかしだからといって、ものが豊かであれば生活が何不自由ない状態であれば、じゃあ、心が豊かになるだろうか。じゃあ、それだけ条件がそろえば、家族も自分も幸せになれるだろうか。ものさえそろえば、心も満たされるんだと、そうどこかで考えていないだろうか。でも、聖書は、イエスさまは、そうじゃないと、ここではおっしゃっておられるわけです。ものが豊かであるなら、心も豊かになれる。そうは言い切れないよとおっしゃっておられるところではないでしょうか。

考えてみれば、私たちの心の、私たちが幸せだと感じる事、大切にすべき愛情や友情や、あるいは安らぎを感じる。生まれてきて良かったとか、そういう幸せや落ち着き、そういうものを感じるという事は、これやはり、もちろん生活の安定も必要なんでしょうけれども、それが満たされれば全てうまくいくかという、それはない。目に見えないものを、やはり大事にしていけないと。言い方を換えるならば、目に見えない、そのような愛情や安らぎや自分の幸せを感じるとか、落ち着きを、平安を与えられるということは、お金では買えない部分というのがあるのではないかと。

目に見えない部分ですよ。そこはやはりお金では買えない。そのようなところを、私たち、ちゃんとしていかなければいけないと。ある解説者が、このラオディキアの教会の人たちに対して言っていることは、それら全てをお金で買えると思っていたのではないかな。そう思っていること自体に内面の貧しさ、内なる貧しさがあつたという風に書いていますね。目に見えないものは、決してお金では買えないということが、本当に分かっているだろうか、ということでしょうか。

キリスト教の、聖書の、イエスさまのメッセージというのは、やはり魂の問題、心の問題、それはお金では解決できないのではないかな。もしお金で全てのこと、愛情も優しさも安らぎも、買えるという風に考えているならば、その人の人生は大きな間違いをおかしてしまう。取り返しのつかない過ちを、どこかでね、お金で買えると思っていると、取り返しのつかない過ちをおかしてしまうのではないかと。それが、やはりキリスト教のイエスさまのメッセージじゃないかなと思います。だから、この後の 18 節ですね。「そこで、あなたに勧める。裕福になるように、火で精錬された金をわたしから買うがよい。裸の恥をさらさないように、身に着ける白い衣を買い、また、見えるようになるために、目に塗る薬を買うがよい。」イエスさまから、それは手に入れなければいけないことなのではないか。この<買う>という風に訳されている言葉、これはギリシャ語で<アゴラゾー>という言葉ですね。この<アゴラ>というのは、市場のことです。今で言えばスーパーマーケットのことです。だから、市場に行って、あれこれ買い物をする。そういう意味の言葉なんです。スーパーマーケットに行け

ば、デパートでもそうかも知れませんが、いろいろね、あれも欲しい、これもと目移りをするかもしれないけれども、イエスさまから買うべきものがあるんだというんですね。それは、3つなんだとここので言われています。

多くの解説者がここで言っていること、指摘していることは、この金・白い衣・目に塗る薬、それを3つ買いなさいと言っているんですけども、この3つはいずれもこの時のラオディキアの町の主幹産業といいますか、特産品だったんだと言っています。いずれもラオディキアが、この当時、輸出をしていた、あるいはお金儲けをしていた大事な産業3つなんだというふうには言っているんですね。たとえば、目薬が出てきます。これはラオディキアの目薬というのが、当時とても売れたんだというんですね。この商品の名前は、<コルリオン>という目薬と呼ばれていまして、固形で、液体じゃない。おそらく水か何かで溶かして、顔の上に塗った目薬じゃないかと言われてますね。ちょっと刺激性がちょっとあるような目薬。それを塗ると、はっきり目が見えるようになったんじゃないかと。このラオディキアの目薬として売れたんですね。それから、白い衣。これは、前回も少し紹介しましたように、ラオディキアは羊毛工業の中心地でしたから、特に黒紫の羊の毛を使ったラオディキアの服は、ブランド”ザ・ラオディキア”という形で、ラオディキアの服と言って世界中で重宝されたと言われてます。高級品だった。黒紫の服だったんですね。そして、金ですね。これは金細工とか金の産出というよりも、当時のラオディキアには銀行があったわけです。金融業。はっきり言うと、金貸し業ですね。お金が商品になる。これで多くのもの、ラオディキアの人たちが主幹産業ということで、3つの産業を通して、ラオディキアのお金、富の源だったんですね。

だけど、18節でイエスさまがそのことをもとにしながら、だけど本当の意味で豊かになるためには、「そこで、あなたに勧める。裕福になるように、…」本当の意味での、内面的な豊かさ、真の豊かさ、幸せと言うものを得るためには、「火で精錬された金をわたしから買うがよい。」と。<火で精錬された金>この言葉に関しては、ペトロの手紙第1章7節の言葉が、とてもこれに応じる言葉だと思います。「あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかに金よりはるかに尊くて、…」と言われてます。まさに、信仰のことなんだ。<火で精錬された金>というのは信仰のことだと、ペトロの手紙では言われていますね。これは、キリストから買いなさい、むしろ与えてもらわなければいけない<信仰>。これ無くしては何より内面の貧しさ、あるいは内面を超えての豊かさ、魂の平安というものを与えられる、本当の豊かさを与えられるのは、キリストから与えられる信仰、これを手に入れなさいよということでしょう。

そして次に、「裸の恥をさらさないように、身に着ける白い衣を買い、…」先ほど申しましたラオ

ディキアの特産の服は、黒紫の洋服でしたけれども、そうじゃなくて白い衣を身につけなければいけないよとおっしゃっています。この<白い衣>は、ヨハネの黙示録には度々登場します。天の御国に行った時に与えられる服ですよ。天の御国のユニフォームが、白い衣なんです。あるいは、伝道者パウロが良く使った<キリストを着る>ということだと考えてもいいかもしれませんね。やっぱりこれも信仰によって与えられる、着せてもらえる、そういうものではないでしょうか。

そして最後に、「見えるようになるために、目に塗る薬を買うがよい。」ラオディキアの目薬は、<コルリオン>、よく売れたんですね。そのラオディキアの目薬が良く売れた理由の一つが、実際にラオディキアという町が、まさに先ほど申しましたように、大地震があっても自分たちの力だけで復興できるような力を持っていた。逆に言うと、その時の時流に乗って飛ぶ鳥を落とすような発展をしている。その周りの人たちにも有名なんですよ。そうするとどう考えたかということ、周りの人たちは、『ああ、ラオディキアというのは、先端を行く町、先を見る目、確かな目があるね。そこで売っているラオディキアの目薬、そりゃ、きっといいに違いない。』と考えたんです。ラオディキアの目薬を塗って、一つのキャッチコピーのように、先が良く見えるようになる目薬として、売れたんですよ。実際にラオディキアがそのように繁栄しているから、きっとこの目薬を塗れば自分たちも先が見えるようになるかもしれない。そう考えて売れたんだというんですね。なるほどなと思います。

それに対して、イエスさまがここでおっしゃっているのは、もっと本当のものが見えるようになるために、目に塗る薬を買うがよい。<本当に大事なものは目には見えないものなんだ>という言葉がありますが、本当のものが見えるようになる、そういう薬だ。あるいは、もっと先が見えれば、ラオディキアは考えていたと言われていたわけですけども、いや、もっと先、つまり死んだ後のことまでも見通せるような目を持つことになれと。これも、信仰によって与えられる<信仰の目>であって、<信仰という薬>を塗ることによって与えられる<信仰の目>というものと言えるのではないのでしょうか。これらのことは、結局19節「わたしは愛する者を皆、叱ったり、鍛えたりする。だから、熱心に努めよ。悔い改めよ。」ラオディキアの教会員たちに、厳しいことを言っていましたね。あなたたちは、金持ちだと言っているけれども、本当に惨めだ。哀れな者、目の見えない者だ。だから、私から金をそして白い衣を、薬を買うがよい。あるいは、熱くもなく、冷たくもない。あなたたちはなまぬいとおっしゃって、口から吐き出そうとしてると、非常に厳しい言葉をラオディキアの教会員たちに、ここでイエスさまはおっしゃっておられますよね。厳しいことを、これまで言ってきた。それは、19節「わたしは愛する者を皆、叱ったり、鍛えたりする。」愛してるからなんだと言うんです。こんな厳しいことを言ってきたのは、あなたがたを愛しているからだよと。愛すればこそ、愛する者だからこそ、

敢えて叱ったり、鍛えたり、厳しいことを言うんだ。これはまさに、我々からみれば、イエスさまが熱く愛してくださるという時と、厳しいことを言う時と、叱ったり、つまり冷たいなという感じることもあるということではないでしょうか。でも、それは、どちらにしても、愛しているからだよと、敢えて厳しいことを言う。敢えて叱ったり鍛えたりするんだと。でもどちらにしても、それは、愛の行為なんだというんです。そのことをしっかり受け止めていくことが、信仰の歩みなのではないかと。逆に言うならば、どっちつかずのなまぬるい、どうでもいいや、このままでいいんだということのままじゃいけないよと。今、厳しく私たちは責められているんだろうか。いや、今、熱く愛されているんだろうか。いずれにせよ、キリストが私たちを本当に愛してくださって、熱くなれ、あるいは時には厳しく接しろと、そういう風に私たちを支え、守って、導こうとしてくださっている。特に、今の段階、このラオディキアの教会に対しては、これは冷たく敢えてイエスさまはおっしゃっておられるんです。「だから、熱心に努めよ。悔い改めよ。」と、悔い改めて欲しい。なまぬるい、どっちつかず、どうでもいい。あるいは、このままでいいんだという風に思っている者になって欲しくない。どうでしょうか。

私は、ここでイエスさまの有名な「心の貧しい人々は幸いである。天の国はその人たちのものである」という御言葉を、ああ、本当にそうだな、繋がっているなという風に思われました。あれは、自分自身が本当に貧しい者だ、哀れな者だ、そう分かっている者は幸いだとおっしゃっておられる言葉です。自分が本当に貧しい者だ、哀れな者だ、キリストの救いがなければやっていけないっていうことを、本当に知っている。それは、天の国はその人たちのものだ。天の御国まで繋がっていくよと、そう教えてくださっています。逆に言えば、自分が本当に情けない者だということ、痛いほど感じているという事が大事なのではないか。自分はもう大丈夫、満ち足りている。もうこれで充分だなんて言っていると、本当になまぬるいとイエスさまおっしゃっておられるんだと思います。

実は今日の箇所の「**惨めな者**」という言葉が 17 節に出てきましたけれども、まさに伝道者パウロは、その「**惨めな者**」という言葉、ローマの信徒への手紙第 7 章 24 節で用いています。最後にそこを読んで終わりたいと思います。新約聖書の 283 頁。第 7 章 21 節からお読みしましょうか。「それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまとっているという法則に気づきます。「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則があって心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりにしているのが分かります。わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。」これが先ほどの 17 節「**惨め**」と全く同じ言葉が使われています。「わたしはなんと惨めな人間なんだろう。」>「死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。」25 節「わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このよ

うに、わたし自身は心では神の律法に仕えていますが、肉では罪の法則に仕えているのです。」急になぜ、<救い主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。>と。惨めな人間だからといって、死に定められたこの体が、誰も救ってくれないと嘆いているわけですよね。嘆いている言葉の中に急に、25 節<主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。>と出ているのがよくわからないと言われていた箇所の一つなんですけれども、でもこれは、この時のパウロの気持ちは、この惨めな人間なんて誰が救ってくれるのだろうか。しかし今は、25 節<自分は、イエス・キリストによって救われた。>イエス・キリストという人がいて本当にありがたかった。感謝します。救われた自分をここでは感謝している、そういう事ではないかと考えられています。本当にそうだろうと思うんですね。「なんと惨めな人間なんだろう。」と、そういう風に言っているパウロが、しかし真の平安、真の安らぎを与えてくれたのが、キリストなんだ。キリストがいてくれて、良かった。本当に自分を救ってくれたのは、主イエス・キリストなんだ。イエスさまという存在に、本当に心から感謝をしていると、そういう事ではないでしょうか。主の十字架の救いと復活に、まさに救いを感じていたパウロならではの、パウロらしい、これは私たちの言葉ともしていきたいという言葉ではないかと思えます。

お祈りを致します

天の父なる神様

誰が私を救ってくれるでしょうか。

本当に心の貧しさを私たちは忘れがちになって、あたかも生活の豊かさで全てが手に入るとどこかで思い込んでしまっている愚かな者であることを、主よ、憐れんでください。

このウイルスの、今の状況にあっても、何より生活することが大事だと、

もちろんその思い、それはその通りだと思います。

けれども、だからといって、忘れてはいけないものも、もう一つあるのだということ

今日の箇所から教えられるように思います。

私たちがみるべきもの、目をとめていくべきものは、身の回りのことも、もちろん大事ですし

最近の事も大事ですけれども、ずっと見通していける目も、あなたから与えられていることを、本当に大事にしていくことが出来ますように導いてください。

どうぞ真の豊かさを、私たちがあなたから与えられていくことでありますように支えてください。

そして、どうか共にこの時を、主よ、忍耐を持って乗り越えていくことが出来ますように。

御名によって祈ります。

アーメン